

マニ教文学における讃歌と詩篇

—— マニの涅槃をめぐる ——

須 永 梅 尾

Hymns and Psalms in Manichaean Literature

— Around the Parinirvana of Mānī —

by

Umeo Sunaga

I

仏教文学、キリスト教文学がそうであるように、宗教文学というのは、一般的にはその宗教の經典類の総称として用いられている。マニ教文学という場合でも、その中心となるものは經典類であり、それには当然、開祖マニ（正式にはマーニーと発音するが、マニと表記）直筆の正典（これは今日、現存しない）が含まれる。更にそれに付随して、マニやその使徒、弟子たちをはじめとした伝記類、マニの思想、信仰を土台として譬喩等で潤色された説話・物語類、説教類、懺悔・告白文類、祈禱文類、韻文を主として読誦される詩篇、唱詠礼讃を専らとした讃歌類、その他書簡類までを含めて考える必要がある。これらの中には、既に湮滅したりして、現存しないもの、考古学的発掘によって、近年になって新たに発見または解説されたものなどを含めて考えると、その量はかなりの数に上るのである。⁽⁶⁾

筆者は、以上のマニ教文学史料類を大別して、(1)文字通り文学とよぶるものとしての言語で記述された資料（書かれたものとよぶことにする）、(2)口承などで伝えられ、語られた資料（語られたものとよぶことにする）、(3)朗唱読誦される詩篇。讃歎、讃仰を主とした讃歌類（両者を一括して、歌われたものとよぶことにする）の3つに分けることが出来ると思う。因みに、これら資料に用いられている言語も、多岐にわたり、中世ペルシア語、パルティア語、ソグド語、ウィグル語、モンゴル語、中国語（漢語）、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語、シリア語、コプト語、アラブ語、ロシア語などと多言語に及んでいる。

こうしたマニ教文学の中から、本稿では、(3)の歌われたもの、詩篇と讃歌とを特に採り上げて、それもマニの死の周辺に⁽⁷⁾焦点を定めて、そこに流露しているマニ教信仰が、どう表現されているか、考えてみることにしたいと思う。何故かという、マニ教の信仰表現の特徴が、語ること（懺悔、告白、祈禱、説教）や、書くこと（經典、説話、物語、書簡、教義注釈）よりも、歌うことの方に強く現われているように思われるからである。歌うという行為には、他の宗教的行為に比べると、信者同志の知的段階の格差というものが左程問題とならず、民衆的で、信者の誰でもがリズムに乗って容易に参加できるという点がまず考えられるであろう。それに歌うという行為には、歌を歌っているうちに自分が歌っているということを忘れて、歌自身が歌を歌っている。そのような忘我、恍惚、三昧の境地に自然になるということがある。このようなことは宗教的体験として貴重で

あると同時に、その宗教の民衆化⁽⁸⁾ということを考える場合にも、極めて大事な役割を果たしているのである。殊に、マニ教が典籍宗教、知的宗教といわれ、各地域で限られた知識階層の人々⁽⁹⁾の間でのみ信奉されたと普通思われているが、必ずしもそうとばかりはいいきれないことは、懺悔、告白文など東方史料（中央アジア、シナトルキスタン方面から出土した断片史料）を精細に検討することによって明らかになってきた。そこで、本論では特に讃歌と詩篇を幾つか採り上げて考えてみようという訳なのである。

II

詩篇と讃歌については、内容の上からいうと、厳密にいつて違いがある。讃歌が主たる内容が神への讃美であり、特に礼拝^{かえり}に当って必要な楽曲を伴う歌唱である。それに即興の歌も加わることがあるが、要するに旋律が要となる。詩篇の方は、救いを求め、罪を懺悔し、神の恩寵への哀願、感謝、箴言などを包摂する頌、詩が主で、それを読誦、朗詠するものである。両者にはそうした厳密な意味での相違があるが、一般信者の多くに愛好されるという点では同じであり、共に信仰表現には最も適していると思われるので、特に区別しないで考えることにする。

これらには、(1)普通の形のもの、(2)マニの死を契機として追悼、追慕するという形のもののという2種類に分けることが出来るであろう。内容からこれを分類すると、前者(1)をノン・パリニルヴァーナ（非涅槃）型、後者(2)をパリニルヴァーナ（涅槃）型とよんで区別することが出来る。パリニルヴァーナ（Parinirvana）とは仏教用語からの借用語であることはいままでの間もないが、この語は後世になって学者が分類上、便宜的に用いたものではなく、トゥルフアン（高昌）出土史料のうち、中世ペルシア語、パルティア語による讃歌で、マニの死を詩的な表現で取り扱った後者(2)の歌の史料に、この見出しがつけられていたところから、この名でよぶことになったのである。マニの死を扱った讃歌のうち、最も代表的な史料は、後章で更に詳しく紹介する予定であるが、トゥルフアン出土のマニ教断片のM5、M8171で、前者はマニの死から110年後（マニの没年を274年とすれば384年）、後者は同じく55年後（同じ没年で計算すれば329年）と推定されていて、この語は讃歌以外の断片史料、例えばM5569にも見えており、マニの死後かなり早くからマニ教徒たちに用いられていたことが知られるのである。（因みに、M記号はマニ教トゥルフアン（高昌）出土文書類を意味し、Manichaicaの頭文字をとった。数字は整理番号）

さて、(1)ノン・パリニルヴァーナ型讃歌（パリニルヴァーナの見出しがないもの）の好例は次のM224 I, Recto と Verso であろう。この史料はアンドレアスとヘニング両氏によって公刊された。⁽¹⁰⁾

M224 I Rect

apwryšn 'yg pry[stg] rw[š]n

(1) rwsynag 'y [dy]lan bzng (2) 'y rwšn ky tarygan (3) kwd rwsynyd ○ ○ 'ynk (4) aayd mwrđakyz '[yg] (5) wabrygan ky ysk aw [///] (6) byšazynyb ○ ○ 'ynk aayd (7) nawaz nyw awd prwk ky (8) [naw]ak kwd wydaryd as (9) [drya]b ○ ○ 'ynk aay[d]

表ページ

（見出し表題）光の御使い（マニ）を讃え奉る。

「心を照らし、光を灯すもの、暗夜を照らし給うお方。見よ、疾^{はや}いを癒^いし、死者を甦^{よみが}えらせ給うお方がお出でになる。見よ、海原から船を導いて、雄々しくも幸いを齎^{たま}らし給うお方がお出でになる。見よ、……………がお出でになる」

M224 I Verso

(1) raym[st] šah 'y (2) rwšnan ky dašnaan (3) nywan hmbkšyd ○ ○ 'ynk (4) [aa] yd

šrasynag (5) [dw]šmnyn kyšan gyganyd (6) ayd wšwbyd ○ ○ tw arzan (7) hy pđan many
kwd[awn] (8) 'stayšn a[wd] apryn (9) w baan w mhraspnđan

裏ページ

「善き贈り物を仕分けなさる光の賢きお方が……（お出でになる）。見よ、放埒な讐なす者たちを打ち懲らし、摧邪し給う方がお出でになる。御身、父なる方よ、主なるマニよ、讃仰と祈りとにふさわしいお方、そして神々と光との素など……………」

ここでは、歌われている光の御使いを、讃仰、待望するものに、戦う勇気を奮いたたせる力として働かせているように思われる。なお、この詩の特徴として、登場する慈愛の神々や暗黒神たちの特質を表わすキーワードに相当する語の頭文字を、表ページでは、l, m, n, また裏ページでは、r, š, t の順でそれぞれアルファベットの語順で配列されているのが注目される。l は lan で [dy] lan の略語、意味は心。m は mwrđakyz で死者を甦えらせる人。n は nawaz で船を導く人（水先案内人）。r は rwšnan で光。š は šrasynag（放埒な者）。または šmnyn で [dw] šmnyn の略で、讐なす者をそれぞれ意味する。

つぎに敦煌出土の摩尼教下部讃から幾つか例を引いて見たい。この下部讃は唐代の写本で、スタイン将来によって現在大英博物館所蔵のものである。原本の中世ペルシア語、パルティア語から、漢訳されたものであるが、内容から見るとマニの使徒（弟子）たちの作が多く、上限はかなり古くまで遡ることが出来る。マニの直弟子でその死の際にも立ち合った最長老思信＝シシン（シシニウス）により、歌われた歎無常文（83行～85行）では、

歎無常文、未思信法王為暴君所逼因即製之。

告汝一切智人輩 各聴活命真実言
具智法王忙儻仏 咸皆顯現如目前
我等既蒙大聖悟 必須捨離諸恩愛
決定安心正法門 勤求涅槃超大海

「具智法王マニ仏が皆の前に顯われ給うたのは、~~●~~目前で見るように顯らかである。われわれは、大いなるお悟りを頂いたからには、必ず御教えに安心決定し、勤めて涅槃を求めて、あ的大海原を渡るべきであると。」

ここで忙儻とあるのはマーニーの音写である。マニの啓示はグノーシスの啓示を特色とするが、ここでは大聖悟（悟り）という表現になっている。グノーシスの表現から仏教的聖道門的表現へと変化していることが注目される。

同じくマニの愛弟子の一人のモーイエー（Mo-yeh）作の普啓讃文から（135行）、

普啓讃文、末夜慕闍作

……………

又啓普遍忙儻尊 闍黙恵明警覺日
從彼大明至此界 敷揚正法救善子

「再び普く攝取し給うマニ尊、至高者、悟りの導師、叡智の光明、光の太陽に[＊]啓しあげる。彼の光明の国から、この世にお出でになり、正しい御教えを布き、善き教え子らを救い給うお方よ。」

末夜はモーイエー（人名）、慕闍はパルティア語 Hammōzāg（導師）の音写、闍黙はイエー・ンモー（Yen-mo）で、パルティア語の Jamyḡ（また Yamāg）の音写、意味は双生児の意で、マニの後継者を意味する称号である。ここで歌われている信仰の態度は、素直に謹しんで、神を受け入れようとするそれが伺える。

同じく、この普啓讃文 152 行から、

又啓真実平等王 能戦勇健新夷数

雄猛自在忙働尊 并諸清浄光明衆

「また真実平等の王、よく戦い、勇ましくも清新なる夷数（イエス）、猛くも自由自在に働かれるマニ尊、併せて清浄なる光明の神々に啓しあげる。」

夷数はパルティア語のイシュー（Yishō）の音写。

以上の漢訳された詩文は何れも七言絶句の形、韻を踏んでいて、漢訳に当って訳者の苦心の跡が伺われる。これらはマニやその先蹤、イエスへの敬虔な願い、待ち望む心情を訴えたものである。マニの呼称に仏教的表現が見られると共に、その先蹤イエスさえもが、仏教的表現で讃えられている。

もう一つ、中世ペルシア語（文字はヘブライ語文字で表記されているが、本稿ではローマ字に直して表記する）史料の讃歌 M501b, Verso I を紹介したい。

- 1] ysn
- 2] ryn
- 3] stayšna
- 4]byw
- 5] kwday ° r [?] m
- 6 t]w wyndam
- 7 an]ya bwzygr
- 8] ° ° mary manya
- 9] rwš[na] gra

「……………讃美し奉る。……………主、平安……………われらは御身を讃仰し奉る。……………マニ、救世主……………主なるマニ……………光り照らし給うお方……………」。つぎに、

M501b Verso I

- 1 wzrg ° °
- 2 nkwyn šhrdarypot
- 3 kwday argana
- 4 rwšnara bdyā
- 5 zyryptw .š ° °
- 6 arbawa rwšna
- 7 kadwš kadw[š
- 8 a[w t]w mary m[any

「偉大で……………。まず第一に、猊下、尊者、光り照らし給うお方。第二に叡智あり……………耀く光。御身、主なるマニに敬虔でありますように」

以上の2つは断片史料で、脱字破損の箇所が多く、不完全な詩文であるが、意味は偉大な至尊のマニへのひたすらなる讃嘆に尽きる。

次にエジプト出土のコプト語の詩篇（Psalms）から、マニの殉教を記念するペーマ（ギリシア語 βῆμα でマニの来臨する椅子のこと。祭儀におけるマニのシンボルと考えられる）詩篇の幾つかを引用しよう。

ペーマ詩 C C X X I I (8 ページ, 30~33行)。(18) 文字はコプト語であるが、本稿ではローマ字で表記する)

peau nek pniut p[man] ichaios papeau [pnag nnoute pswr [ntk pkan] abe abal tnrf pt
[aseais mpwnh ppresbeutes nte nap[ti se peau mpekbema qekmanhmet ette …… [……

「御身、わが父マニ、栄光あるお方、〔偉大なる〕神、救世主に御榮えあれ。〔御身は〕罪を取

り払うお方、おいのちの宣布をし給う方、天上におわせられる方々をお遣わしになる方。御身がお着きになられ給うたベーマに御栄えあれ」

ベーマ詩 C C X X V II (20ページ, 19~25行)⁽¹⁴⁾

tnouwst nek pkritec pparakletoc tn smame mpekbema etkhmast atwf akei hnoeipene ppna
ntmes pplks pe taftnnauf nti ies, akei hnoeirene pre n brrc nmpsuchaue. akei hnoeirene
pntais pmanichaios. tnouwst mpekbema mntek diathene nbrre.....

「われらは、御身、裁きをされる方、パラクレートゥス（マニ）を拝み奉る。われらは、御身がおわしますベーマ（椅子）に向って祈り奉る。御身は静かにお出でになった。イエスがお遣わしになった真理の精霊、パラクレートゥスよ、御身は静かにお出でになった。人間の魂の新たな太陽よ、御身は静かにお出でになられた。われらの主、マニよ。われらは御身のベーマを拝み、また御身の新たな約束事を……………」

つぎにイエス詩、C C L X VII (84ページ, 14~16行, 24行, 25行, 85ページ, 19~21行)⁽¹⁵⁾

tisapsp mmak pajais pmanichaios mati [ne] nglam ntšbiw mpanahte mnnaslel mn nanes-
tia mnnamntnae etaiteu hnpekren tiouwst ne thikwn mpasah tetaimerits em patineu aras
alla etbe pessait etaiswtm peau nek pajais Ies parefswte ppkls [pgro nek pajais pmanichaios
petaign pefs [eje ej o mmee mpooue anak [ma]ria th[eo]na

「御身、わが主なるマニよ、わが信仰と祈りと断食と御身の御名によって与えた施しに対して、その報いをわたしにお与え下さい。わたしが、御身の御名を耳にただけで、まだ良く存じあげないうちに、わたしを愛しみ下さったわが主を、心から拝み奉る。わが主イエス、救世主、パラクレートゥスに御栄えあれ。わたくしと同じくマリア、テオナも、本日本当にそのお言葉が真実であると分りました御身、わが主マニに勝利あれ。」

この詩では、イエスがマニと肩を並べて讃仰と感謝の対象となっている。以上のベーマ詩とイエス詩で、pplks はパラクレートゥス、ppna はプネウマ、pajais は主を意味する語であるというように、キリスト教と関連の深い語が頻出して来るのも、このエジプト出土の西方マニ教詩篇の特徴である。

もう一つ例として、これもエジプトで出土したマニ教のコプト語文典、ケファライア（師章集）のうち、X X X VIII, 102 ページ, 4~12 行を紹介しよう。⁽¹⁶⁾但しここではコプト語原文のローマ字表記は省略し、訳文のみを記述することにしたい。

「かの弟子たちが、彼（マニ）の説かれた御言葉すべてを聞いた時、答えて問いかけた。大いなる神、力強い神、それは全能のお方である。御身はその御力と神から授けられた御力とで為されたことどもを、われらの為にお説きになった。御身がわれらのために為された御恵みに対する御報いを、一体どなたが為さるというのでしょうか。御身を遣わされたお方なのか？ それについては問いません。だが、われらが御身に申しあげたいのは、御身に御報いしたいのはわれらであることである。御身への信仰を強くし、そのお指図を守り続け、われらに説き給うたお言葉と心を一つにすることである。」

この詩を含めて、ケファライアの各文は4世紀の初め頃には創られていたようである。先に挙げたコプト語詩篇もほぼ同じ頃から始っていたと推定されるので、これらにはマニの死後30年とは隔たらない時期のものも含まれていたと考えてよい。それだけに教祖マニを追慕する歌声には、ある生々しい臨場感を感じとることが出来るのである。

以上、本章で挙げた讃歌、詩篇は何れもマニの光の御使いとして、この世に将来し給う至福と高德を限りなく讃仰したものであるが、東方的史料（トゥルファン、敦煌出土史料など）では明らかにマニが、その死後のかなり早い時期から神格化されていることが知られる。またその文学的表現

に、仏教的傾向が著しいことが伺える。一方、コプト語史料を中心とする西方的史料では、寧ろキリスト教的表現が一段と濃厚になっているのが注目される。パラクレトゥスはいうに及ばず、ブネウマ、主 (pajais) などにもキリスト教的聖霊観が暗示されている。以上は主にマニを中心とした讃歌、詩を紹介したが、こうした形式には、勿論イエスを含めて、マニの使徒、弟子たちの功績を讃えたものも多数ある。例えばトーマス詩篇、弟子のヘラクレイトス詩篇などを挙げることが出来る。

III

さて今度は、分類(2)のパリニルヴァーナ (涅槃) 型の場合を考えることにしよう。パリニルヴァーナという語を用い、マニの死を歌った最も典型的讃歌⁽¹⁷⁾といえる M5 について、表ページⅡの一部、裏ページⅠ、Ⅱのところを引用して見よう。ただパルティア語では涅槃をパリニブラーナ (parinibrana) と書き、サンスクリット語のパリニルヴァーナからの借用語で、メタテシス (音位転換) したものであることを注意しておきたい。

(V) prnybr'nyg

(R) b's'n

(Recto I) (省略) (57) o pd sxt cwhrm (58) m'h šhryywr (59) pd dwšmbt 'wd (60) jm'n 'ywnds (Verso I) (61) kd hmyw 'yšt'd (62) pd 'frywn (63) fr'mwxtyyš (64) tnb'r pdmwcn (65) 'bdyn o cw'gwn (66) kd wrwc tgnbnd (67) wyt'b'd (68) rwšnystr 'c (69) myhryzd rwšnyft (70) wybr'z'd wrdywn (71) 'wd fryštg' 'n (72) wy'wrd 'wš'n (73) drwd d'd 'w yzd (74) r'stygr o qdg (75) 'sm'ng (76) 'mbst 'w (77) byh 'rg zmyg (78) wlrz'd wcn (79) wzrg 'xšy'd u (80) mrdwhm'n ky (81) 'ym nys'n dyd (82) whyrd 'hynd u (83) kft 'br dym o o (84) rwc 'st drdyn (85) 'wd jm'n z'ryh (86) kd prnybr'd (87) fryštg rwšn (88) hyštyš ymg'n (89) ky dyn p'ynd 'wš (90) kyrd pd drwd .. g ... (Verso II) (91) [...] 'n o šhrd'r (92) 'rg'w wxybyy (93) pdyst hnjm'd (94) cyš w'xt 'w (95) 'm'h kw (96) 'šm'h wsn'd (97) prxyz'n 'c 'br (98) pd wrdywn 'byn (99) 'wt'n hrw (100) jm'n 'dy'wryft (101) frš'w'n o tšyy (102) wnwh b]w]t (103) 'spwr sd'wd (104) ds s'r'n (105) cy sd 'yy tw (106) bg 'w 'njmn (107) r'myšn 'w's (108) gd jm'n kw (109) 'rd'wyft (110) whynj'h 'wd (111) 'ym g'h (112) wxybyy 'brdr (113) pdr'z'h o nyw (114) 'škyb'm (115) šwb'n'n (116) r'st'n wyjdg'n (117) 'mwst'n 'wd (118) nywš'g'n (119) 'by'd d'r'm (120) yzd'n 'ndrz 'wd

「表ページⅠ・Ⅱ (省略)

「正しい神は、彼の祈りを聞かれ、天使と贈物をお送りになって告げられた。選ばれた出離者に諭しを与えよ、そして御身 (マニ) は天上へ昇り、不滅の住み家に参上なされよと。」シャフレウル月 (ペルシア古代の暦の月名) の第4日、月曜日、11時に (裏ページⅠ) 彼 (マニ) がいつもの通り、お祈りを献げている折しも、彼はいつも着ている肉体の衣服を傍に脱ぎ捨てた。稲妻が光るように彼は輝き、その乗り物は太陽よりも一際光彩を放つようだった。天使は飛び来て語りかけ、正しい神に安らぎを奉った。天空の家が外方へ離れ、大地は震動して、大きい御声がどこからともなく聞えて来た。こうした御証を見て、戸惑いを見せる民衆の顔に、御声がかけられた。光の御使いが、パリニブラーナ (涅槃) にお入りになったその日は苦渋に満ちた一日であったし、その時は悲痛にうち沈んだ一時であった。彼はその教えを守る (マニ教会の) 指導者たちを、此の世に

残し、偉大な此の世の外衣（肉体）に、永遠の別離を告げられた。（裏ページⅠ）高貴なお方、主は御自身の約束を果たすことをわれらにお告げになった。『汝らのために、私は水容器（地下水道、即ちカーレーズの譬喩）の中に居ることになるであろう。私は汝らにいつでも救いの手を差し延べよう』と。見よ、御身よ、ああ、神よ、平安を此の世に積み重ねられるために、天上にお昇りになってから110年が経った今、御身が出離者（光の国に入ることを許された人）を天上へ引き挙げ、御身の玉座（ペーマ）をもそうなされる時が到来したのである。今こそ勇気をもって、牧者たちよ、出離者たちよ、聴従者たちよ、堪え忍ぼう。われらは神々のお指図を決して忘れることはしないであろう……………」

（118）の *nyws'g'n=niyōsāg* は聴従者。彼らは出離者（*wjydgryft*）のために、生涯奉仕することを使命とする人、即ち在家信者に当る。この文中で（90）～（91）までの、破損等で欠字のある部分については、他の史料で M748 とよばれるものがあり、その文中にこの文と同じ語句と思われるところがあるので、幸いこの欠落の部分に補うことが出来た。即ち、（90）*kyrd pd drwd hmg rm*（91）*kl'n* とあるのがそれである。これらに伺えるマニ教信仰は、110年前に地上を去って昇天し、光の国に還帰されたマニが、再び地上に救済主として降臨する日を、ひたすら待望する気分包まれていることである。

ではつぎに M8171 という史料の讃歌を見てみよう。⁽¹⁸⁾ このパルティア語讃歌は、ヘニング氏の編集した史料集で読むことが出来るが、残念乍ら断片的史料で、あとさきの歌詞が不明である。ヘニング氏の推定では、さきの M5 より55年早く歌われたものであるらしいことは、第2章で触れた通りである。（詳細は後述）

（V）*pmybr'nyg*

（R）*b's'n*

（Recto I）（1）*'w ky ny 'dy'wr* ○○（2）*l'myn nxwyn*（3）*bwxtg pdgryft*（4）*ws 'rg'wyft*（5）*'c pydr u m'd*（6）*rwšn 'wt hrw*（7）*br'dr'n hw'xsđ*（8）○*mrđ whyg'r rwšn*（9）*[h] syng 'd pnj*（10）*[pwl] r'n rwšn'n*（11）*] st tšy*（12）*]*。
hr gy'n（欠落）

（Recto II）（13）*twxmg'n m [...] g*（14）*qyrbrk [n] bhr*（15）*mrnyn (?) rft 'd tw*（16）*bg mšyh' ○ frh*（17）*cy tw wzrgyft ky*（18）*šhyd w'xt 'wt*（19）*wyfr'št 'bdymwt*（20）*r'štyft 'spwr*（21）*qyrdg'n tšy*（22）*rwšn 'wt t'r ○*（23）*cw'gwn 'w'syc*（24）*pyd'g 'y [...] n [*（欠落）

（Verso I）（25）*[...] šyšn d'm*（26）*z'dmwrđ zwnws*（27）*cy tnb'r hrw*（28）*ns'w (?) 'b'yšn*（29）*fršygyrd rg*（30）*'bdynjyd ngwšyd*（31）*ky bwxt q'myd ○*（32）*tšy w'xt hrwyn*（33）*bwt'n pydr'n*（34）*hsyng'n jyr'n*（35）*kw bw'h 'w d'm*（36）*] b wnwł*（欠落）

（Verso II）（37）*pnj 'c prnybr'd*（38）*mry m'ny fryšt*（39）*kd 'br pdr'št*（40）*'w m'h wrdywn*（41）*'ngwd 'd pydr*（42）*'whrmzdbg 'w*（43）*bwj'gr mry m'ny*（44）*'fryn'm ○ bwt*（45）*brmg wzrg šw [j]*（46）*'wt ngr'wyn [.....*（47）*qdyxwd' [y.....*（48）*'wt 'w [.....*

「（左ページⅠ）……………その人は誰一人、助ける人としてのない……………。初めて救われたお方（マニ）は、^{おんちち}御父、光の母、すべての慈しみ深き^{はらから}同胞から多くの高貴なるものを享けられた。慈しみ深き光の原人、5人の光の御子たち、……………魂たち……………。

（左ページⅡ）御縁深きお方、徳に気高く、死の悲劇に遭われた御身の役目、神キリスト（メシア）。御身の偉大な光栄を、どなたが語り、示すことが出来るのか？ 完璧な真理、光と闇との

働き、……………それを今、明らかに闡明出来るように……………。

(右ページⅠ)……………被造物、魂の輪廻(z'dmwrđ)界(=此岸、光と闇との葛藤の世界)のすべてにとって、この世の終りにあってその肉体はかけがえがないのであるから、速やかにお遣わしになって、いつものような……………誰を助けようとしなさるのかをお聞きしよう。何故ならば、御父はすべてのもののために、仏陀たち、悟りに目覚めた方々を、この世に遣わすであろうとお告げになっているのだから……………見よ……………。

(右ページⅡ)御使い、主、マニが亡くなられ、月の乗り物で天に昇り、御父、神オフルミズドの御許へ留まられてから……………5年経った今、われらは主、マニ、救済者を讃えよう。(主のために)歎き悲しむのは、偉大なことであり、聖なることである……………家の主……………」

特にこの Verso Ⅱ の部分を訳すに当って、つぎのことに注意する必要がある。「(37) pnj 'c prnybr'd (38) mry m'ny fryštg……………」(御使い、主、マニが亡くなって()5年経って)とある文のはじめの欠落部分と推定できるところである。果してこれはマニの死後5年と読んでよいのだろうか? そうだとすれば、この讃歌はマニの死後5年経った時点で歌われたことになる。ところがこの文と同じ史料ではないかとされている M I 236 というマニ教断片史料と比較して見ると、M8171 Verso Ⅱ の冒頭の行の文は、M I 236 の文のように、'br s'r pnj'st 'wd pnj 'c prnybr'n……………となる。即ち御使い(マニ)の死後5年(pnj)とあるのは55年(pnj'st 'wd pnj)と補うことが出来る。とすれば、このパルティア語のパリニルヴァーナ讃歌は、マニの死後55年後に歌われ、書かれたということになる。

この様に、パリニルヴァーナ讃歌にはマニの死後何年という風に日付が記述されている。これはさきに紹介した M5 の史料にも、マニの死後110年という日付の記載がある。何故日付が讃歌で歌われているのであろうか。この問題は、他のもう一つの問題と絡み合う関係があるように思われる。一体このパリニルヴァーナの歌は誰によって、何時、何時まで、何処で、何のために歌われたのかという問題である。推論になるが、恐らくこの所謂パリニルヴァーナ讃歌の語をもって、率直にこの歌を歌っているところを素直に受けて解するなら、歌ったのは東方マニ教団の信者たちであったであろうことは間違いない。これら讃歌の断片史料がトウルフアン、敦煌地区の出土物であることを考慮するならば、マニ在世中から始められていた東方伝道が、東北イラン、パルティア故地、ソグディアナ、ウィグル、中国、モンゴル、西方チベット⁽¹⁹⁾(アルチ地区)までを視野に置いたマニ教団の人々によって、かなり早い時期から、教団の衰滅に到る時期(遅くとも西方ウィグル衰亡の頃で、13世紀)にまで語り歌い継がれたであろうと推察出来る。またそれは、何のために用いられたのか? いうまでもなく、マニ教々会における祭儀の際に用いられたであろうということである。マニ教の祭儀に関する記録史料は極めて少く判然としないが、たといあったとしても極めて質素なものであったらしい。ただ、マニの死を悼み、追想と世界の終末におけるその再臨を願うベーマ祭だけは、さきにも引用した如く、西方マニ教徒たちによって歌われたコプト語のベーマ詩篇等からも確かめることが出来るように、キリスト再臨の思想=終末思想の影響をかなり受けた特別な催し方であったようである。それからもう一つ考えなくてはならないのは、この讃歌に日付が挿入されているということは、この歌の作品が、作詞のたびに日付を記す慣習があったのではないだろうかということで、毎年春まだ浅い頃(2月24日または3月2日)、ベーマ祭のたびに、マニの死後何年目と日付を明記してその降臨の日を待望しつつ、新たに讃歌を創ったものと考えられるのである。不幸にしてこれら多数の日付の入った讃歌群は、ここに挙げた2つの讃歌を除いて、雲散霧消してしまったか、その部分が破損等のため欠落してしまったかいずれかの悲運に出会って、今世紀の発見までに至ったものと推定出来るのである。

IV

このパリエルヴァーナという語を、ブッダ、イエス、マニという偉大な宗教的指導者の死との関係だけに使用されているという点を、改めて思い返してみる必要がある。この語は、再生という輪廻の意味をもつ死の場合には用いられず、この世界を離脱（涅槃、入滅）する場合だけに限られているのである。M5にある如き、(54) 'wd tw 'wr 'br sn'h 'w 'r'm 'nwšg（そして御身は天へ高く昇り、不滅の住み家へ参上なされよ）、また数行置いて、kd hmyw 'yšt'd (62) pd 'frywn (63) fr'mwxttyš (64) tnb'r pdmwn (65) 'bdyn（彼はいつも着ている肉体の衣服を傍に脱ぎ捨てた）、更に M8171 の [...] šyšn d'm (26) z'dmwrđ zwnws (27)（魂の輪廻界のすべてから離脱する）とか、kd 'br pdr'št (40) 'w m'h wrdywn (41) 'ngwd 'd pydr (42) 'whrmyzdbg……（彼が月の乗り物で昇り、御父、神オフルミズドの御許に留った時、）などという表現は皆そういう場合をよく示している。つまり、このパリエルヴァーナという語が、偉大な宗教的指導者（マニをはじめブッダ、イエスなど）の死に限定して用いられているとはいえ、この讃歌をマニ教の信者たちが使用していることを忘れてはなるまい。正しくこの讃歌はマニ教々団に由縁のある人々の手になった作品である。マニの死を追憶、哀惜すると共に、寧ろ慶賀しようとさえしているのは、マニが光の永遠なる国に入られたことの功德を、敬虔に、只管信じることによって自らも光の国へ参入しうることを望み、期待し、その時、即ち光と暗黒とが分離を遂げる宇宙終末の時が来らんことを切々と祈念するにあったことが分る。

加之、このパリエルヴァーナという語が、マニ、ブッダ、イエスの場合にだけ用い、ザラスシュトラやその他の有力な預言者たちの名のところでは用いられていないのは、何を意味するかということも考えて見るべきだろう。とりわけザラスシュトラは、ゾロアスター教の開祖であり、本来マニにとってはブッダ、イエスと並んで崇敬した先人であった筈である。それがマニの刑死とそれに続くマニ教徒迫害に深く関ったササン朝ペルシア帝国の宮廷内のゾロアスター教（寧ろズルヴァン教的ゾロアスター教というべきか）勢力に対するマニ教徒の反撥、怨念が、直接には関係のない遠い教祖ザラスシュトラの形影を薄からしめることになったと思われる。また、ユダヤの預言者たちに対しては、マニ自身の神学的立場から、黙示録の預言者を除いて、旧約聖書の世界を否定的に見ているところから、そうした姿勢をとった訳が首肯出来るであろう。

以上を総括してみると、ブッダ、イエス、特にマニがベーマ祝祭の儀式を契機として、東西にわたるマニ教々団において、一段と神格化が強められてゆくプロセスが、これらの讃歌、詩篇を介して明瞭に認めることが出来るのである。つまり、東方教団ではブッダ——マニの系譜において仏教の影響が色濃く反映され、また西方教団（エジプトを中心に、東地中海周辺）ではイエス——マニの系譜において新約的、キリスト教的傾向が一層深められてゆく過程で、マニの神格化がそれぞれ推し進められたことが理解出来るであろう。

ではマニの神格化はどのようにして始ったのかについて考察する必要があるが、これは紙幅の関係から別の稿に譲ることにしたい。ただ見通しとして次のように考えられるのではあるまいか。マニの神格化は、その歴史から考えて仏教やキリスト教等と異って、教団の発展が政治権力と結びつく過程で起ったのではなく、むしろ政治権力（ササン王朝）の抑圧に対抗するため、マニ教団の結束を更に強固なものとする方向で、それが求められたと考えるべきではないだろうか。

(注)

- (1) H. J. Polotsky, *Manichäische Homilien*, Band I. Stuttgart, 1934
- (2) J. P. Asmussen, *Xuāstvānift*, *Studies in Manichaeism. Acta Theologica Danica* VII, Copenhagen, 1965
- (3) W. Bang, *Manichäischer Laien-Beichtspiegel*. *Le Muséon* 36, 1923, pp. 137—242
W. B. Henning, *Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch*, *APAW*, 1936, X
- (4) C. R. C. Allberry, *A Manichaean Psalm-Book*. *Manichaean manuscripts in the Chester Beatty Collection, Part II*, Stuttgart, 1938 (以後 *Psalm-Book* と略称)
- (5) W. Bang, *Manichäische Hymnen*, *Le Muséon* 38, 1925, pp. 1—55
E. Waldschmidt-W. Lentz, *A Chinese Manichaean Hymnal from Tun-Huang*, *JRAS* 1926, pp. 116—122
———, *A Chinese Manichaean Hymnal from Tun-Huang, Additions and corrections*, *JRAS* 1926, pp. 298—299
E. M. Boyce, *The Manichaean Hymn-Cycles in Parthian*, *London Oriental Series*, Vol. 3 1954
- (6) ———, *A Catalogue of the Iranian manuscripts in Manichaean script in the German Turfan collection*. *DAWB Institut für Orientforschung, Veröffentlichung Nr. 45*, Berlin 1960
- (7) W. B. Henning, *Mani's last Journey*, *BSOAS*, X. 4, 1942, pp. 941—953
拙稿, 「インド行以後におけるマニーの生涯」小室栄一先生古稀記念論文集, 五月書房 1983年, 91—111頁
- (8) H. J. Polotsky, *Manichäismus*. *Pauly-Wissowa, Realenzyklopädie der K. A. W. Supplem.* VI, 1935, pp. 241—272
- (9) (2)(3)参照
- (10) F. C. Andreas-W. B. Henning, *Mitteliranische Manichaica aus Chinesische-Turkestan II*, *SPAW*. 1933, pp. 322
- (11) 敦煌文献スタイン, No. 2659 (東洋文庫蔵マイクロフィルム)
- (12) F. C. Andreas-W. B. Henning, *ibid.* p. 553
- (13) *Psalm-Book*, p. 8, lines 30—33
- (14) *Psalm-Book*, p. 20, lines 19—25
- (15) *Psalm-Book*, p. 84, lines 14—16, lines 24, 25, p. 85, lines 19—21
- (16) H. J. Polotsky-A. Böhlig, *Kephalaia*, Band I, 1. Hälfte, *Lieferung* 1—10, p. 12, lines 4—12
- (17) F. C. Andreas-W. B. Henning, *ibid.* (III) 1934, pp. 862—865
- (18) ———, *ibid.* (III) 1934, pp. 868—869
- (19) H. J. Klimkeit, *Das Kreuzessymbol in der zentralasiatischen Religionsbegegnung*, *ZRGG* 31 (1979) pp. 99—115